実践団体・プラン基本情報

実践団体の基本情報

記入日	2023 年 12 月 31 日（2023 年度のチャレンジプラン）
プラン名	コロナ禍後の持続的に発展可能な福祉避難所開設計画
実践団体名	東京都立調布特別支援学校
代表者名	原田勝
電話番号	042-487-7221
メールアドレス	Kouzaburou_Tsunematsu@member.metro.tokyo.jp
実践団体の説明	本校は 1976 年開校の知的障害がある子供のための特別支援学校で、小学部・中学部合わせて児童生徒約 170 名が学んでいる。通学区域は調布市・三鷹市・狛江市で、多摩川や野川の流れる緑豊かな環境にある。「『地域』に生き、ともに伸びる学校」というスローガンを掲げ、地域と連携した教育活動を通して児童生徒の自立と社会参加を目指し、共生社会の実現に向けて特別支援教育の充実を図っている。昔から地域とのつながりが深く、調布市のほか、近隣の調布市立第一小学校と電気通信大学、隣接するマンション「コスモ調布ヶ丘」との間に、それぞれ防災協定を結んでいる。地域の人が本校の児童生徒を応援する「リソース・ネット」というボランティア団体もあり、様々な協力を得ている。災害時に学校が孤立しないように普段から地域との結びつきを大事にし、つながりを深める形で防災教育の取組を行っている。
所属メンバー	○東京都立調布特別支援学校：原田勝（校長・代表）、常松浩三郎（主幹教諭・推進担当者）、生活指導部　他 ○ＰＴＡ：平林一子（校内会長）、濱田まりえ（校外会長）、漢那亜希子（総務・危機管理担当）、中山万季（総務）、小坂貴子・中本有紀（書記）、鈴木絵梨・山下麻美（会計）　他 ○調布市：中川昇（総務部総合防災安全課課長）、尾坂宏樹（同防災対策係長）、総合防災安全課職員　他 ○電気通信大学：五十嵐賢太郎（総務部総務企画課課長補佐）、

	総務企画課職員　他 ○リソース・ネット：水戸和幸（大学教授・代表）、大釜博美（防災担当）、梶原政子、北沢貴子、嶋田浩一、清水美佐子、坊野美代子、茂木秀樹、山田常夫、養老毅暁　他 ○東京学芸大学大学院：山本寛子（大学院生・会計担当）
活動の本拠地	東京都調布市
活動開始時期・結成時期	2022 年 4 月
過去の活動履歴・受賞歴	2010 年度　安全教育推進校（東京都） 2011 年度　安全教育推進校（東京都） 2012 年度　防災教育チャレンジプラン実践団体 2022 年度　防災教育チャレンジプラン実践団体 安全教育推進校（東京都） 2023 年度　防災教育チャレンジプラン実践団体 安全教育推進校（東京都） ぼうさい甲子園特別賞（フロンティア賞）

プランの基本情報

プランでの実践主体	1. 学校･教育関係　3. 保護者･ＰＴＡ　4. 地域組織 5. 国･地方公共団体　7. 企業･産業関係　8. ボランティア
プランの運営側の人数（実数）	約 30 人
プランの活動地域	東京都調布市
プランの防災教育の対象者	10. 教職員･保育士等　11. 保護者･ＰＴＡ　12. 地域住民 13. 企業･組織　15. 障がい者　16. 支援学校等児童生徒
防災教育の対象者の人数（実数）	約 200 人
プランが対象とする災害	1. 地震　2. 津波　3. 風水害　4. 土砂災害　5. 火山噴火 6. 雪氷災害　8. 火災　9. 災害全般
プランの活動目的	1. 防災意識を高める　2. 災害を想定した訓練　3. 防災に関する知識を深める　4. 遊び･楽しみの要素を入れた防災 5. 災害を疑似体験　6. 災害に強い地域をつくる　7. 災害対応能力の育成　8. 防災に役立つ資料･材料づくり　9. 防災に関する技術の習得

対象者が身につく知識・技能等	1．地震・津波・火山災害　2．気象災害　3．災害時に発生する課題･影響　4．過去の教訓が教える対応策　6．平時に行う被害を出さないための備え　7．災害発生時に身の安全を確保するための行動　8．災害対応･復旧･復興時の立ち直りに向けた助け合い
プランの活動形態	1．イベント･行事　2．講習会･学習会・ワークショップ 4．総合的な学習（探求）の時間　5．教科　6．特別活動 7．道徳　8．学校内の諸活動　12．体験学習 13．避難･防災訓練　15．読書･絵本･読み聞かせ
プランでの連携先	1．学校･教育関係　3．保護者･ＰＴＡ　4．町会･自治会 5．自主防災組織　8．国･地方公共団体　9．公共施設 10．企業･産業関係　11．ボランティア　12．ＮＰＯ 14．職業･職能団体　15．学術組織　16．個人
実践にかかった金額	10 万円未満

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
４月	計画立案 会合	「危機管理マニュアル」整備 救急救命訓練準備 シェイクアウト訓練準備	災害時利用の自動販売機設置 救急救命訓練 シェイクアウト訓練（防災アドバイザーの助言の検証①）
５月	計画修正 会合	距離別・部門別配備態勢整備 火災避難訓練準備 宿泊防災訓練事前学習	火災避難訓練 防災標語づくり
６月	会合	地震避難訓練準備 宿泊防災訓練準備	災害用伝言ダイヤル体験① 地震避難訓練（防災アドバイザーの助言の検証②） 宿泊防災訓練
７月	会合	風水害避難訓練準備 セミナーでの発表準備	風水害避難訓練 「学校の安全・危機管理セミナー」での取組発表
８月	会合	要配慮者移送訓練・福祉避難所開設訓練準備	要配慮者移送訓練・福祉避難所開設訓練 防災ブックマークづくり
９月	会合	避難所運営講座準備 総合防災訓練準備 中間報告会準備 ぼうさいこくたい出展準備 ぼうさい甲子園応募	避難所運営講座 総合防災訓練、体験型安全教育支援機構による安全教室、防災教育推進委員会① ぼうさいこくたい出展、来場者への福祉避難所アンケート
10 月	会合 次年度の計画立案	二次避難訓練準備	異臭による二次避難訓練
11 月	会合 次年度の計画立案	起震車体験訓練準備	災害用伝言ダイヤル体験② 地震の取組と起震車体験訓練
12 月	会合	放送不通避難訓練準備	地震による放送不通の避難訓

		研修会での発表準備 「じしんのうた」制作	練、防災教育推進委員会② 京都府立宇治支援学校の全校防災研修会での取組発表
１月	会合 次年度の計画修正	講演会での発表準備 活動報告会準備 煙体験訓練の準備 「持続的に発展可能な福祉避難所開設マニュアル」整備	山村武彦氏の防災講演会での取組発表 火災の取組と煙体験訓練 東京都全特別支援学校ＰＴＡへの福祉避難所アンケート
２月	会合 次年度の活動準備	活動報告会準備 地震避難訓練準備	災害用伝言ダイヤル体験③ 抜き打ち地震避難訓練
３月	会合 次年度の活動準備	地震・火災避難訓練準備	抜き打ち地震・火災避難訓練

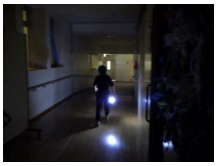
実践したプランの内容

プラン全体の概要 	時代の変化や災害の多様化に対応した、地域のニーズに応えられる福祉避難所のスマートでスムーズな開設の仕組みづくりをするプラン。内容は、①地域と結びついて、あらゆる災害に対応できるような実践的な防災教育の取組を行うこと、②関係機関と協議し、「持続的に発展可能な福祉避難所開設マニュアル」を作成すること、③命を守るのに役立つ最新の知見と資料の収集を行うこと、である。 方策として採ったのは、①地域や外部とのつながりを深め、災害時に活かすことのできる実践的でユニークな訓練等の防災の取組を行うこと、②障害のある人と家族が安心できる福祉避難所の実現を目指し、特別支援教育のノウハウや保護者目線に立った工夫を採り入れること、③活動の幅を拡げ、最新の知見を採り入れるとともに、担当者が代わっても受け継がれていく仕組みづくりをすること、である。 成果として、①地域や外部との連携が深まり、地域ぐるみで防災力の強化が図れたこと、②福祉避難所の開設に向けた意識の醸成が地域ぐるみで図れたこと、③児童生徒が命を守るための行動を取れるようになり、長期的に取組を進めていく土台づくりができたこと、が挙げられる。

プランの「チャレンジ」の結果 	大きく三つのチャレンジを行った。①本校を取り巻く様々な機関が「防災力の向上」という共通の目的で連携し、災害時の実践的な対応力を磨けるか。②特別支援教育のノウハウや保護者の意見を活かした「福祉避難所開設マニュアル」を作成し、利用者が安心して過ごせる福祉避難所の実現に近づけられるか。③災害時に地域の人が無理なく入口を開錠したり、避難スペースを各自で工夫して快適にしたりして、福祉避難所のスマートでスムーズな開設に近づけられるか。 活動を経て、①については、災害時の実践的な対応力を磨

	くことができた。②については、ぼうさいこくたいのワークショップの来場者の意見に耳を傾けたり、様々な機会にアンケートを取ったりして、「福祉避難所開設マニュアル」に反映させ、利用者が安心して過ごせる福祉避難所の実現に近づけられた。③については、要配慮者移送訓練や福祉避難所開設訓練を地域の人と行い、福祉避難所のスマートでスムーズな開設に近づけられたが、入口の開錠という点では、検討してきた鍵ボックスが実用化に時間のかかることが分かった。当面、電気通信大学に協力を仰ぎ、24 時間稼働している守衛所に鍵を預ける方向で検討を進める。いずれ鍵ボックスが実用化されたときには導入したいと考えている。

実践内容・方法・成果	**１　地域と結びついた実践的な防災教育の取組**
	（１）応急救護訓練（4/5） 調布消防署の救急隊に依頼し、ＡＥＤと心肺蘇生訓練用人形を用いて、教職員が応急救護の方法を実践的に学んだ。 **（２）火災避難訓練（5/2）** 全児童生徒対象。校内で火災が発生した際の基本的な避難の仕方を学ぶ。最初の避難訓練なので、基本的な内容で実施。 **（３）シェイクアウト訓練（4/17）、地震避難訓練(6/22)** ３月の抜き打ち地震・火災避難訓練への防災アドバイザーの助言を４月と６月の訓練で検証。児童生徒に有効と分かり、以後の地震時の安全確保行動で採り入れることに。工夫は、机の脚を押さえる箇所にシール等で目印をつけたこと。 **（４）災害用伝言ダイヤル体験（6/1、11/1、2/1）** NTT が提供する体験の機会を活かし、保護者と教職員対象に実施。伝言の内容を毎回変えるとともに、保護者からの意見を次回に反映させて、防災意識の向上を図っている。



（５）宿泊防災訓練（6/30 夕～7/1 朝）

中学部１年生対象。内容は、①通信訓練（５回）、②火災避難訓練、③初期消火訓練、④防災講話、⑤就寝に備えた物品運搬訓練、⑥非常食作成訓練（２回）、⑦非常食体験（２回）、⑦物品運搬訓練、⑧災害備蓄品利用訓練（暗闇体験）、⑨学年の防災の取組、⑩就寝時の安全確保訓練、⑪引き渡し訓練、というもの。事前学習で「防災標語」を作り、訓練後に標語を活かした「防災ブックマーク」を制作。来校者や地域の人、ワークショップ来場者、放デイ等に配布し活用。

（６）風水害避難訓練（7/3）

全児童生徒対象。一斉避難の訓練と異なり、自分で避難先を考えて避難する取組を、天候に左右されない体育館で実施。内容は、①災害イメージの具体化、②具体的な避難の選択と実践、というもの。①は、気象災害のＤＶＤを観て、台風・雷・急な大雨・竜巻のときの避難の仕方を学ぶというもの。②は、木・川・建物の描かれた３枚のつい立てを並べ、どこに避難すればよいかクイズを出し、児童生徒に避難先を考えて自分たちで避難してもらうというもの。子供たちは積極的に動き、選択が間違っていても笑顔で受けとめられた。

（７）要配慮者移送訓練・福祉避難所開設訓練（8/8）

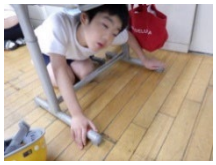
調布市、電気通信大学、リソース・ネット、ＰＴＡ等と協力して実現。風水害時に連携して対応するイメージを共有。学校到着後、スマートでスムーズな福祉避難所の開設に向けた試みとして、参加者に普通教室にある物を自由に使ってもらい、各人が快適と思える避難スペースの設営にあたる。

（８）避難所運営講座（9/12）

中学部１年生対象。初の避難所運営講座。取組の内容は、

①講義（災害の種類と被害、避難所について、ＨＵＧゲームの説明）、②ＨＵＧゲーム、③振り返り（各班の発表）、というもの。大事な計画に参加している喜びと真剣さを見た。

（９）総合防災訓練（9/13）



内容は、全児童生徒対象の①抜き打ち地震避難訓練、②防災に関する授業、教職員対象の③災害対応訓練。①では、天井板が崩落したとの想定で中央階段を通行不可に。②では、段階的・系統的な内容となるように「各段階で取り組んでほしい内容例」を実施要項に掲載。③では、「部門別の活動」を初めて実施。災害対策本部、連絡班、施設班、食糧班、救護班、避難所支援班、経営企画室が「ミッション　チェックシート」に沿って活動。当日は少年写真新聞社が取材。

（10）ぼうさいこくたい（9/18）

調布市、電気通信大学、リソース・ネット、ＰＴＡ、大塚包装工業、ＤＸアンテナ等と力を合わせ、「障害のある人と家族が安心できる福祉避難所の実現を目指して」というテーマでワークショップ。内容は、①障害のある人の感じ方や捉え方の疑似体験、②段ボール製の簡易トイレの展示、③鍵ボックスの遠隔操作、④「福祉避難所開設マニュアル案」の提示、というもの。来場者との会話やアンケートで方向性を確かめられ、その後つながりが深まることになった人も。

（11）異臭による二次避難訓練（10/24）

全児童生徒対象。コスモ調布ヶ丘、リソース・ネット、電気通信大学と連携して実施。おおまかな流れは、①マンション住人からの異臭充満の連絡、②校内への注意喚起放送、③災害対策本部による対策の検討、④避難指示放送、⑤甲州街道側駐車場への避難、⑥電気通信大学への二次避難、というもの。隣接するマンションとのつながりを深めたことで、た

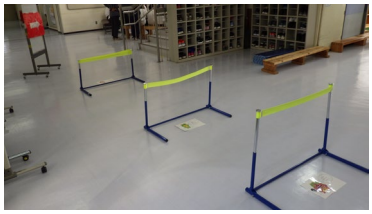
くさんの住人が沿道に立ち、二次避難中の児童生徒を見守る。二次避難場所ではマンションの理事長に感謝状を贈呈。

（12）地震の取組と起震車体験訓練（11/24）

全児童生徒が体験。スターツＣＡＭと初めてつながり、同社所有の免震起震車で阪神・淡路大震災の揺れを再現。起震車に乗る前にシェイクアウト訓練を実施。机がない場所では、カメのポーズで首の後ろを両手で守ることを初めて伝達。ＰＴＡ、リソース・ネット、スクールバス乗務員も起震車体験をし、免震機能も体験。当日は少年写真新聞社が取材。

（13）地震による放送不通避難訓練（12/12）

JCOM と調布エフエムに計画段階から相談。地震が収まった後、放送できなくなる。本部参集者が全学年にトランシーバーを届け、校舎の安全確認も行う。児童生徒と校舎の状況報告後、トランシーバーで避難指示。当日は JCOM が取材。



（14）火災の取組と煙体験訓練（1/15）

全児童生徒が体験。調布消防署と連携し、煙体験ハウスを提供してもらう。煙体験ハウスに入る前に姿勢を低くする取組を入れる。具体的には、だんだん低くなる三つのハードルとユニークなイラストを設置。最初は、怖そうな鬼が「ここをくぐってみよ!!」、次は、優しそうな龍が「あとすこし!!」、最後は、笑顔の女の先生が「よくできました!!」というもの。

（15）抜き打ち地震避難訓練（2/5～2/9 抜き打ち週間）

（昨年度は緊急地震速報後、地震が起きる。校舎の安全確認を行い、危険箇所が見つかる。安全な経路を各自判断し避難）

（16）抜き打ち地震・火災避難訓練（3/6）

（昨年度は地震が収まったとの放送中に本震到来。校舎の安

全確認を行う中で火災発見。障害物を避け、安全な経路選択）

（17）その他の活動

ア　自動販売機の設置・稼働（4/4～）

災害時にも活用できる自動販売機に着目し、一年がかりで導入を果たす。災害時、帰宅困難者等に自動販売機の製品の無償提供が可能に。８月の大規模な訓練では、キリンビバレッジにかけ合い、参加者に自動販売機の製品を無償で提供。

イ　福祉避難所用のランタンとメガホンの調達（7/3）

福祉避難所用に東京都保健医療局にあっせんを依頼し、ＬＥＤの「球ランタン」20 個とハンディメガホン４本を調達。

ウ　池袋防災館防災ナイトツアー（8/4）

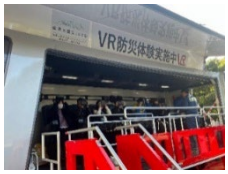
生活指導部の有志が参加。関東大震災について学んだ後、夜間の地震への対処の仕方、出火への対処の仕方を実践。

エ　避難者用の被服の調達（9/25）

ムサシノ商店との会話で、避難者用に予備の室内着があれば助かるのではと気づく。東京都保健医療局にあっせんを依頼し、様々なサイズの男女別の上着とズボン 100 着を調達。

オ　緊急用給水袋の提供（11/24）

スターツＣＡＭが約５ℓ入る緊急用給水袋 100 袋を提供。



カ　ＶＲ防災体験車による防災体験（12/8）

リソース･ネットの有志が参加。電気通信大学構内で地震･火災･風水害についてＶＲ防災体験をし、対応の仕方を学ぶ。

キ　三校防災協定の見直し(12/12～)

2013 年に近隣の調布市立第一小学校と電気通信大学と締結したまま、形骸化していた「三校防災協定」を見直すことに現在の校長や学長が賛同。今年度中に新しい防災協定に署名し、次年度から連携して防災の取組を行えるように整備。

２　「福祉避難所開設マニュアル」の作成

昨年度から取り組み続け、「持続的に発展可能な福祉避難

所開設マニュアル」を形にすることができた。

第１章に「平常時における取組」を、第２章に「災害時における取組」、第３章に「避難者が安心できる工夫」を置き、様々な「様式集」をつけて、必要最小限のコンパクトなものにした。なぜ必要最小限のコンパクトなものにしたかというと、福祉避難所を考えている他の団体が、このマニュアルをたたき台として活用し、自分たちの手でそれぞれの施設に合った「福祉避難所開設マニュアル」を作ってもらいたいと考えたからである。それが「持続的に発展可能な」ということにもなると思った。

第３章の「避難者が安心できる工夫」には、障害のある人が安心して過ごせるような工夫や対応の仕方を盛り込んだ。ここでいう障害を今回は知的障害・発達障害に限っているが、今後様々な障害を採り入れていくことも可能である。そうした自由度の高い、活動とともに発展していくようなマニュアルであってほしいと考えている。

障害のある人が安心できるような工夫や対応の仕方を採り入れるため、学校で行っている特別支援教育のノウハウを活かしたほか、保護者目線での対応の仕方を知るためにアンケートを活用することにした。９月のぼうさいこくたいでのワークショップでは、「福祉避難所開設マニュアル案」を示し、来場者にアンケートを求めた。１月には東京都の全ての特別支援学校のＰＴＡにアンケートを依頼し、寄せられた回答から有益な情報をたくさん得ることができた。アンケートの結果はＰＴＡにフィードバックするつもりである。

３　命を守るのに役立つ最新の知見の収集

活動を通して専門家や専門の団体・企業とつながることで、命を守るために役立つ最新の知見をたくさん得られた。

（１）地震時の安全確保行動――机があるとき

	３月の抜き打ち地震・火災避難訓練の様子をＮＨＫが放送し、番組を観た仙台市在住の防災アドバイザー、ＹＹネットの吉田亮一氏からアドバイスをいただいた。机の下にもぐるときの注意点のほか、机の脚を手で押さえる箇所を具体的に示していただいた。生活指導部で試したところ、効果が一目瞭然だったため、机の脚を手で押さえる箇所にシール等で目印をつけた上で、４月のシェイクアウト訓練で検証し、６月の地震避難訓練でも検証した。その結果、児童生徒が十分に取り組むことができたため、これ以後の訓練等での地震時の安全確保行動に採り入れることにした。 **（２）地震時の安全確保行動――机がないとき** ９月の総合防災訓練で、中学部１年の防災に関する授業を体験型安全教育支援機構が受け持ち、「地震の安全教室」を実施してくれることになった。ここで行われたのが、地震のとき、机がない場所での体を守るポーズの実践であった。具体的には、カメのように体を小さく丸め、手足を引っ込め、首の後ろに手を回して守る、というものであった。首の後ろには大事な神経がたくさん通っていて、ここを守ることが肝心であると教えていただいた。中学部１年生が興味をもち、真剣に取り組んでいたため、これ以後の訓練等での地震時の安全確保行動に採り入れることにした。 **（３）地震時の安全確保行動――「じしんのうた」** 12 月に地震時の安全確保行動を歌詞にしたオリジナルの「じしんのうた」を制作した。音楽科の教員に歌ってもらい、録音した。今後様々な機会に活用し、地震時の安全確保行動を児童生徒に定着させ、より一層命を守れるようにする。

プランにおける工夫：プランを実践する上で、下記について具体的に工夫をしたことはありますか。
該当するものについて具体的な例を挙げながら記入をしてください。

この項目は任意項目であり、全てを埋める必要はありません。当てはまるもののみ記入してください。

1．【準備段階】運営側の担当者を決める際の工夫	運営を担う各団体に窓口となる人を置いた。決め手は協力的で、実行力があり、ある程度決断できる立場にある人。
2．【準備段階】地域のキーパーソンと連携する際の工夫	学校に来てもらったりリソース・ネットの会合に来てもらったりして、顔を合わせた上で協力を依頼するようにした。
3．【準備段階】運営側を組織化する際の工夫	各団体の担当者をリソース・ネットに取り込み、リソース・ネットの会合や連絡メールを通して組織化した。
4．【準備段階】対象者や対象地域の範囲を決める際の工夫	運営側の核となる団体をしぼり、対象を広げすぎないようにした。多ければそれだけまとまらなくなると考えたため。
5．【準備段階】準備時間を確保する際の工夫	リソース・ネットの会合に向けて準備をし、会合で資料を提示して詳細な説明を行うようにした。
6．【準備段階】活動場所を確保する際の工夫	リソース・ネットの会合が電気通信大学で行われることが多かったため、担当者を通じて確保してもらうようにした。
7．【準備段階】活動資金を確保する際の工夫	
8．【準備段階】知識や情報を収集する際の工夫	知り合った専門家や専門の団体に教えてもらったり、リソース・ネットのつながりで情報を共有してもらったりした。
9．【準備段階】教育・訓練プログラムや教材を作成する際の工夫	他の学校や団体の取組を参考にしたり、Web 上で情報を捜したり、生活指導部をはじめ職場の信頼のおける人に相談にのってもらったりしながら、アイデアを形にした。
10．【実行段階】経験豊富なアドバイザーを確保する際の工夫	過去のつながりのほか、知り合った機会を逃さず、その場で思いを伝え、その後も電話やメールで感謝を伝えることで距離を詰めて、助けてもらえるようにした。
11．【実行段階】地域の理解を得て関係機関と連携する際の工夫	調布市総合防災安全課や電気通信大学、リソース・ネットと力を合わせて取組を進めていたため、地元の企業や団体に協力を依頼する際、話が通りやすかった。
12．【実行段階】活動時間を確保	学校での訓練等の防災の取組は、あらかじめ担当者を決め

する際の工夫	て準備してもらった。人に任せられない取組や急に行うことになった取組は、運営側の各団体の担当者と連携して実施。
13.【実行段階】活動経費をなるべく抑える際の工夫	会計担当を置くようにした。
14.【実行段階】他の実践団体と交流する際の工夫	顔が見える形で言葉を交わすなど、安心感を大事にした。
15.【継続段階】後任者を育成する際の工夫	異動のない、地域の人たちで構成されるリソース・ネットに注目し、その中から若手を選んで説得にあたった。
16.【継続段階】活動で得られた知識・経験を、かたちにまとめる際の工夫	他の学校や団体の取組を参考にした。
17.【継続段階】活動の成果を外部に発信する際の工夫	知り合った後で必ずメールを送るようにし、発信してもらえるまで粘り強く交渉した。
18.【継続段階】活動内容を見直す際の工夫	意見に耳を傾け、アンケートを取るようにした。

今後の活動予定・今後の展開	学校主導で地域や外部とつながって進めてきた２年間の防災教育のチャレンジを経て、今後は地域の人たちによる二つの団体（リソース・ネット、ちょうふ災害福祉ネットワーク）が取組を継承し、発展させていくこととなった。調布特別支援学校としても活動に積極的に携わっていく。

その他（ＰＲポイントなど）	